

地域の100の課題から 100のビジネスを創出する

株式会社小高ワーカーズベース
代表取締役 和田 智行



私が暮らす南相馬市小高区は、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の爆発事故により、二〇一一年三月から約五年四か月もの間、居住が認められない避難指示区域となりました。我が家も避難指示区域となり、私も家族とともに埼玉県川越市や会津若松市などで避難生活を送っていました。

二〇一二年四月、我が家の周辺は「避難指示解除準備区域」に再編され、居住は認められないものの、立ち入りや仕事をする事が認められるようになりました。いずれ避難指示が解除され、帰還できるようになる。そんな見通しが立ったものの、住民の多くは、山積している地域課題に対して悲観的になっていました。

しかし、課題とは視点を変えれば「ビジネスのタネ」です。今日の日本が便利で豊かな国となっているのは、あらゆる課題に対し、それらを解決するモノやサービスを先人たちが生み出し、積み上げていったからにほかなりません。小高にも無数の課題があるならば、それを解決するモノやサービスも同じ数だけ生み出していけばよい。それをボランティアではなくきちんと収益化し、その収益をまた次の課題解決ビジ

ネスに投資していく。そんなサイクルをつくることで、「課題だらけの町」を「自分たちが暮らしたい町」に転換させることができるのではないかと考えました。

そこで私は、『地域の100の課題から100のビジネスを創出する』をミッションに掲げ、二〇一四年二月、当時はまだ居住が認められなかった小高区にて、(株)小高ワーカーズベースを創業しました。目指すのは、100人を雇用する一つの企業に暮らすを委ねる地域ではなく、100人を雇う一〇〇の多様な事業者が躍動している自立した地域社会の実現です。

まず始めたのが、コワーキングスペースの開設です。当時は、私と同じようにこの地域でコトを起こそうと考える人が少なからずいらっしゃいましたが、そのためのワークスペースを確保するのがまだまだ困難な状況でした。その解決策として、自らのワークスペースを有料でシェアするというビジネスからスタートしました。

次に、仕事をするにも食事をとる場所がないという課題に対して、地元のお母さんたちにご協力いただき『おだ



仮設商業施設「東町エンガワ商店」

かひるごはん』という食堂をオープンしました。「人が住んでいないのにうまくいくわけがない」といった声も耳に入ってきましたが、まずは除染や工事で汗を流している方々に対して食事を提供すれば喜ばれ、商売としても十分に成り立つと見込んでいました。最終的には作業員の皆様だけではなく多くの住民の皆様にも毎日ご来店いただけるようになりました。お借りしていた店舗のオーナーさんが帰還して自らのお店を再開することになったので、『おだかひるごはん』は一年三か月で閉店としましたが、小高での事業再開の呼び水としての役割を果たせたと考えております。

さらに、スーパーやコンビニの再開見込みがないという課題に対して、南相馬市からの委託を受けて、仮設商業施設『東町エンガワ商店』をオープン



ガラスアクセサリー工房
〔HARIOランプワークファクトリー小高〕

しました。小売りや流通は未経験でしたが、地域の先輩企業の皆様がノウハウをご提供くださったり、仕入れをサポートしてくださったりしたおかげで、お客様も徐々に増えていきました。駅前という立地条件もあり、地元の高校再開後は、電車待ちの高校生が買い食いしながら思い思いの時間を過ごす、どこにでもある普通の光景が見られるようになってきました。オーブンから三年三か月経過し、市が新しいスーパ―を新設したことに伴い、『東町エンガワ商店』は役割を終え、閉店としました。

二〇一五年八月には、若者にとって魅力的な仕事を創ることを目的に、ガラスアクセサリー工房『HARIOラック』を設立しました。「手に職が就く」「仕事と収入の量を自分でコントロールできる」「かわいくておしゃれ」そんな働き方を打ち出し、ガラス職人になりたい女性を募集したところ、県内外から七〇名以上の方が興味を持って小高までお越しくださいました。今は地元の女性五人がゼロから技術を習得し、二〇一九年三月には、独自ブランド『Inzerイリゼ』もリリースしました。彼女たちの作品は県内外の店舗でお取り扱いいただけるようになり、専門学校でガラスを学んだ県外の若者を採用できるようにもなりました。

また、我々だけで一〇〇の事業を創るのではなく、小高に可能性を感じていただける起業家を全国から誘致しようと考え、起業型地域おこし協力隊『Next Commons Lab南相馬』を立ち上げました。現在は、国内外から八名の起業家が移住し、新しい「Craft Sake」を醸造する酒蔵兼バー、馬を活用したビジネス、高齢者や要介護者向けの訪問型アロマテラピーなど、小高をフィールドにした新しい事業創出に取り組んでいます。



coworkingスペース 〔小高バイオニアヴィレッジ〕

その起業家たちの活動拠点として、二〇一九年三月には、宿泊できる coworkingスペース『小高バイオニアヴィレッジ』もオープンしました。変化の激しい社会では、地域に必要な機能やKPIは常に変わることを前提に、公的資金は活用せず民間の資金だけで建設しました。利用者は移住した起業家だけでなく、地域のフリーランサーや首都圏からのリモートワーカーなど、業種も居住地も多種多様で、利用者登録数も二〇二二年二月現在で九〇名を超えています。コロナ禍でキャンパスに通えない大学生たちも、小高に活動のフィールドを求めようになり

ました。彼らは、二か月から半年以上滞在しながら地域との交流を深め、起業家の手伝いをしたり、インターンをしたたりしながら、自身の興味関心に従ってのびのびと学び、生活しています。彼らの存在と地域での活躍は、高齢化率約五〇%の小高にとって大きな光となっています。

旧避難指示区域での起業はたしかに高リスクかもしれませんが、でも、変化が激しく先行きが不透明な現代社会において、一生安心安全が保障された人はもうあり得ません。特に私たちは、震災や原発事故によって、あるべきだった未来もある日突然失ってしまう可能性があることを知りました。だからこそ、「自分ではない誰か」や「自分ではコントロールできない何か」に暮らしを委ねるのではなく、未来は常に予測不能であることを受容し、リスクをとってでも自分の手で暮らしを確かなものにしていくという風土を醸成していきたいです。我々の生み出す事業が、その風土を生み出すきっかけになると信じて、これからも事業に邁進してまいります。